

「NPO 法人高齢者のペット飼育支援獣医師ネットワーク」の設立

佐々木伸雄[†]（東京大学大学院農学生命科学研究科附属動物医療センター長）



1 はじめに

日本国内のペット飼育数はこの10年間をみても著しく増加し、現在、犬と猫をあわせて2,600万頭が飼われていると推測されている。「ペットを飼う」ということは、毎日の食事の世話、排泄物の世話、身の回りのケアや健康チェック、病気への対処や予防、散歩、など様々な義務を負担しなければならない。しかし、ペットとの生活は、楽しい、心地よい、気持ち安らぐ、あるいは、散歩をすることで、社会的接触が増え、多くの飼い主と交流できる、など多くの素晴らしい利点があるからこそ、これだけ多くの方がペットを飼っているものと思われる。ペットを飼っている多くの家庭では、夫婦、親子間での話題の第一はペットに関することである、とよく耳にする。現代社会では、いわばペットが「家族のかすがい」の役割を果たしているものと思われる。

2 高齢者とペット飼育

一方、日本社会は高齢化、核家族化に向かって進んでいる。このような家庭ではペットの役割はさらに高いものと思われる。高齢者が特に一人暮らしをされている場合、しばしば一日中一言もしゃべらない、という可能性がある。テレビを観る、買い物にスーパーに行く、といった程度では、確かに誰かと話しをする必要はないかもしれない。しかし、ペットを飼うと、例えば「ご飯だよ」と言えば、それなりの反応をしてくれ、「散歩に行こう」と言えば、喜んでしっぽを振ってくれる。言葉ではないかも知れないが、きちんとコミュニケーションが成り立っている。また、散歩に行くと、やはり犬の散歩をしている人としてしばしば犬談義になり、あるいは獣医師に関する情報交換をすることもあると思う。しばしば、犬の名前は知っていても、名字を知らない人との会話弾んだりする（例えば、シロちゃんのお父さん、お母さ

んで通じるのである）。

かわいがっていた動物を亡くされた方は、しばしばいわゆるペトロスの状態になるが、他に動物を飼っていたり、あるいはしばらくして新しい動物を飼い始めると、その世話に追われ、動物を失ったといった心痛からも徐々に回復されていくように感じている。ところが、高齢者が飼っていた動物が不幸にして亡くなった場合、多くの方は「もう動物は飼えない」と言われる。自分の寿命を考えると、動物の方が長生きしそうであり、自分で責任もって飼い続けられないであろう、と多くの方が思ってしまうように思う。ご自身の健康に問題が生じたときのことを考え、ペットの行く末を案じてしまうのではないだろうか。ペットを失って以来、自身も元気をなくしたり、あまり外出せずに家に閉じこもった生活になったり、時には病気になったり、という話も耳にする。

このような経験は、多くの獣医師が感じ、見、聞いてきたことと思われる。我々も同じような経験をし、何とかこのような人々に安心してペットを飼ってもらうことができなにか、と考えてきた。

3 高齢者支援をすすめる

そこで、高齢者のペット飼育を支援する獣医師によるネットワークを作り、このような方々のペット飼育を応援しようという組織、「NPO 法人高齢者のペット飼育支援獣医師ネットワーク」を設立した。おそらくこのような活動をされている団体、あるいは個人の方も既におられるものと思う。我々としては、もっとも飼い主に近い立場におり、飼い主からも信頼されている獣医師に、社会貢献の一環としてこのネットワークに参加いただき、その情報網を使って高齢者のペット飼育を支援する仕組みを作りたいと思っている。

昨年8月に東京都にNPO 法人の設立認証を求めた書類を提出し、昨年12月にその認証をいただき、1月から具体的に活動をスタートさせたところである。まだまだ

[†] 連絡責任者：佐々木伸雄（東京大学大学院農学生命科学研究科附属動物医療センター）

〒113-8657 文京区弥生1-1-1 ☎03-5841-5404 FAX 03-5841-8996 E-mail: asasaki@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

スタートしたばかりであり、必ずしもスムーズな活動ができていないが、今後多くの獣医師の方々に参加いただき、広く獣医師ネットワークの範囲を広げていきたいと考えている。

4 活動のスタートとして

当面、NPOの活動として、以下の二つを考えている。

一つは、「訪問ペットケアサポート」で、これは飼い主が希望する場合、会員登録をしていただき、その上で、日常の健康のケア、散歩、といったサービスを獣医師が雇用している動物看護師が行うものである。週に1回なのか、月に1、2回なのかは、飼い主の希望によるが、それも担当されている獣医師と十分に相談して決めていただきたいと考えている。また、訪問者は基本的に看護師であり、もし獣医療が必要であれば、病院に来院する、あるいは獣医師が往診する、ということ言うまでもない。

高齢の飼い主にとって、散歩に連れて行けない、風呂に入られない、あるいは爪を切りたいが一人ではできない、といったことがあると思う。あるいは、ペットの体調が気にはなるが、動物病院へ連れて行けない、ということも考えられる。看護師が訪問することで、これらを解決し、また体調に関して相談できれば、早めに動物病院に連れて行くことも可能である。また、これは人の介護の仕事に属するかも知れないが、飼い主とペット談義をするだけでも喜ぶ飼い主もいるだろう。しかし、このNPOの活動はある意味で、介護関係団体／組織の活動と重なる部分があるかもしれないが、基本的には、ペットに関するのみに限定しようと思っている。

もう一つの活動は、もし飼い主が体調を崩された、といった理由で動物を飼いつづけることができなくなった場合、新しい飼い主を捜す支援である。これには、獣医師のネットワークが特に重要と考えており、普段から、新しい飼い主の候補者となる人材を確保しておくことが重要と考えている。また飼い主からそのような希望があった場合、獣医師はまずその動物の健康チェック、性格判断などを実施する必要がある。その上で、新しい飼い主候補の方に声をかけ、面会してもらい、了解が得られれば、引き取っていただく、というステップを考えている。

ただし、動物によっては、どうしても新しい飼い主になじまず、飼育を続けることが困難な事例も想定される。将来的には、このようなマッチングしない動物の収

容施設を持つ必要がでてくるのかもしれない。また、その動物が病気である場合、新たな飼い主を捜すことは非常に難しい可能性がある。その場合、その治療費を誰が負担するか、あるいは、最悪の場合、安楽死、という選択をせざるを得ない場面も考えられるが、誰にその決断をしてもらうか、といった点も考えなければならない。さらに、これら将来生じることに関し、どのようにもとの飼い主の承諾を得ておくか、といった点も、今後、法的、金銭的な問題を含めてもう少し検討する必要がある。

5 資金と運用

このNPOの運営は、基本的には会員になっていただく獣医師、サービスを受ける飼い主、このような活動に賛同いただける個人からの年会費、ならびに企業などからの寄付によって行う予定である。

このNPOは事務所を置き、主としてメーリングリスト、インターネットを通じ、これら会員の登録を行うと同時に、飼い主からのサポート希望、獣医師の活動状況を把握する。また、動物病院に掲示するポスターの作成、冊子の作成なども行い、獣医師の活動をアピールする材料を提供する。

訪問ケアサポートの場合、看護師の派遣費用（人件費を含めて）を支援すると同時に、何らかのトラブルに対する弁護士との相談、あるいは保険に加入し、万が一看護師に責任のある飼い主のけが、動物のけが、といったことに対する賠償責任を負うこととする。

NPOの役員として、本好茂一日本獣医生命科学大学名誉教授に理事長の就任をいただき、私は副理事長として活動をサポートしようと考えている。また、荒川弘之氏（事務局長）、岡部 明氏、兼島 孝氏、久山昌之氏、小林孝之氏、武部正美氏、親跡昌博氏、藤田桂一氏、望月 学氏、森 俊士氏（50音順）に理事、小暮規夫氏に監事に就任いただいた。さらに、数名の相談役、及び事務局で活動してくれるスタッフがおり、今後の会務を運営して行くつもりである。

この活動は、高齢化社会を迎える日本における、いわば、獣医師による社会貢献ととらえている。実際の具体的な活動内容、事務所、その他の情報は、近日開設予定のホームページ〈<http://www.seniorsupport-vetnet.org>（現在構築中）〉に記載したいと考えている。このような趣旨に賛同いただける獣医師の方々におかれては、是非一度ご連絡をいただきたく、お願いする次第である。